

浄土眞宗の「行」の絶対性

佐々木徹眞

爰に絶対性と云うのは、眞宗の「行」、即ち他力の念佛が諸行に對して超越的優位性をもつとともに、一切の諸行の徳を内に包藏し、且つ諸行に部分的意義を興えると云う意である。嘗つて（印度學佛教學研究第十一卷第一號・拙稿「浄土眞宗の教の超絶性」）私は超絶性という語を用いて、右の様な意味をあらわした。然し超絶という言葉は「絶する」ということを強めるのみで、内に諸行の徳を惣持して諸行を生かすという意味にはとれないようである。故に本稿に於ては絶対性と改めた。絶対性は「教」についても「證」についても云うことができる。即ち一代佛教を方便假門として浄土眞宗に統攝するからである。これを信仰の對象について云えば、阿彌陀佛が諸佛諸菩薩の本師本佛である。従つて彌陀一佛を信仰して餘佛餘菩薩を並べて信仰しない、眞宗独自の彌陀一佛の信仰を體系的に明かにする意圖に於ける一試論である。

今は、眞宗の「行」である他力念佛が諸行に對して絶対性を有するということに限つて述べてみたい。周知の如く、聖

道自力の諸善萬行を廢捨て、念佛一行を專修すべきことを教えられたのは法然上人である。理由は簡明である。諸行は非本願の行であり、念佛は本願の行であるからである。その本願の義は『選擇集』第三章に明示してある。阿彌陀佛が一切の諸行を選び捨てて、偏に念佛一行を選びとつて往生の本願とされた、念佛選擇の所由を勝易の二義をもつて示されたのが、即ちこれである。この勝易の二義が、諸行に對して念佛の絶対性をあらわすものである。

初めに易の義について云えば、念佛は修し易く諸行は修し難い。然も諸行の修するに困難であることを懇切に示して、若し造像起塔の善行をもつて往生の因とすれば、貧窮困乏の者は企て及ぶこと不可能である。故に定めて往生の望みを絶つてあるう。ところが、造像起塔の善行のできる富貴の者は、きめわて少く、貧賤の者は甚だ多い。これと同じく、若し智慧高才・多聞多見・持戒持律をもつて往生の本願とされたならば、愚鈍下智の者・或は少聞少見の輩・或は破戒無戒の者

は定んで往生の望みを絶つてであらう。然るに智慧ある者は少く愚痴なる者は甚だ多い。多聞の者は少く少聞の者は甚だ多い。持戒の者は少く破戒の者は甚だ多い。自餘の諸行これに準じて知ることができる。この故に、阿彌陀佛は普く一切の衆生を攝受するために、造像起塔等の修するに困難な諸行は、捨てて往生の本願と爲したまわず、修するに易き稱名念佛の一行をもつて、その本願となしたまうたのである。これ以上、補足する必要をみとめない明解である。

ところが、この念佛易修の義は機に約して示されたものとして、從來控え目に解釋していたきらいがある。然し宗教に於ては理論の深遠なることもさることながら、先ず大衆が解了しやすく實踐し易いものでなければ、歴史的にその生命を持續することは不可能である。故に歴史的現實に於て宗教を考へる場合には、念佛易修の義はとくに考慮しなければならぬ。念佛の宗教性はこの易の義にある。然るに念佛の易行なる所以は何によるか。それは我等の動舌發聲の動作にあるのではなくして、所稱の名號自爾の徳にあるのである。それで、法然上人は念佛の勝の義については、所稱の名號の功德に於て語られている。

名號者は萬徳之所歸也。然則彌陀一佛所有四智三身十力四無畏等一切内證功德、相好光明說法利生等一切外用功德皆悉攝在阿彌陀佛名號之中。故名號功德最爲勝

と、名號爲勝の義を述べ、これに對して
餘行不然 各守二隅 是以爲劣也

と、諸行の劣なる所以を示し、次いで屋舎の譬をもつて念佛と諸行の勝劣を平易に説明されている。「家」という名は、棟梁椽柱等の木材、瓦壁土或は疊建具等「家」に必要な一切の資材が組織的に形成されて、初めて得られるものである。ただ其等の資材を雜然と集めただけでは「家」と呼ぶことはできない。「家」は組織形成されたものである。故に「家」という名字の中には「家」に必要な一切の資材の徳がおさまつてゐる。ところが、柱という「名」は唯だ柱の徳をもつだけであつて、餘の一切の徳をもつていない。棟梁その他の名字また同様である。故に

然則佛名號功德勝餘一切功德故捨劣取勝以爲本願歟
と論成してある。

右の如く、法然上人は諸行は個別的の徳なる故に劣にして、名號は一つの全體としての功德なる故に勝なりということを示された。諸行と念佛を個と全に於て述べるといふことは、まことにすぐれた論證である。凡そ個別と全體の關係は、數量の多少にあるのではなく質的差異がある。個別的なものが無秩序に多數に集つたからとて、それは一つの全體ではない。個別的なものが組織形成されて一つの全體として、初めて全なのである。故に全には個にみられない獨特の力用がある。

例えば、社會と個人の關係である。個人は社會の構成要素であり、社會は個人を抜きにしては存在することを意味しない。然も社會は個人の集りであるが、それは無秩序なる烏合の衆ではない。結合という組織的形成を介して、一つの全體としての独自の實存性をもつものである。それで、社會は時によつては個人の恣意を拘束する力用をもつてゐる。この意味に於て社會は個人に對して超越的なものである。また社會は個人とは別様に思惟し感情し行動する力用をもつてゐる。このように、名號は單なる諸行の數量的總和ではなくて、一つの全體として組織形成されたものである。即ち法藏菩薩の因位の願と行によつて、南無阿彌陀佛として成就されたものである。名號の成就とはこの義である。一つの全體として修成された故に、南無阿彌陀佛は一切の諸行の徳を内に包藏して、然も個の諸行とは質的に勝れたる功德力用をもつてゐる。かゝるがゆゑに、名號は諸行に對して、最初に述べし如き絶對性を有するのである。

更に一つの全體と部分の關係は、全體が基體であつて部分ではないということである。例えば、一つの生命現象(全體)とそれを形成する細胞(部分)の關係である。生命現象あつての細胞である。同様に名號によつて諸善が往生行(方便化土の)としての部分的意義を與えられるのである。これは諸行論として考察すべきことであるが、今は言及しない。

淨土眞宗の「行」の絶對性(佐々木)

なお、念佛勝の義は所稱の名號の徳をもつて語られていた。衆生の稱名念佛が名號の徳をもつてされるのは、他力廻施の念佛であるからである。念佛が他力であるということ、自力の諸行に對して高次の價值、即ち質的に勝れたる功德力用を持つ、上來述べた絶對性を有する所以である。それ故、聖人の念佛と在家の念佛・澄心の念佛と妄心の念佛・一聲の念佛と十聲の念佛・智者の念佛と愚者の念佛、いずれも功德等しく全くかわり目なしと云い(和語灯二)或は

一文不通の陰陽師が申す念佛と源空の念佛とまたくかはりめなし(和語灯五)

と云う。『選擇集』第五章には、一十百千の念佛いずれも等しく無上功德にして異なることがないとする。若し念佛が自力の修功によつて往生業となるものであれば、一より十はその功德を増し、愚者より智者の念佛の功德は勝れるべきである。然るに等しく無上功德であるということは、毫末も衆生の稱功をみとめない、即ち他力の念佛であるからである。かくて、念佛は一往は「行」ということに於て、諸行に相對しつつも、再往は他力ということに於て諸行と次元を異にし、然も諸行を内に包藏する。かかる念佛の絶對性が法然上人によつて開顯されているのである。

如上の法然上人の念佛義を相承して、念佛の絶對性を更に論理的に展開されているのが親鸞聖人である。先ず念佛が他

淨土眞宗の「行」の絶對性（佐々木）

力であることについては、『教行信證』の初に「謹按淨土眞宗有二種廻向、一者往相二者還相。就_二往相廻向_一有二種廻向、一者往相二者還相」とあつて、四法も往還もことごとく本願力の廻向である。その本願力が如何に成就せられ、それが如何に衆生の上に顯現するかについては『行卷』他力釋・『入出二門偈』及び『信卷』三心釋等に於て詳細に論ずべきであるが、今は略す。ともかくも、念佛は「非凡聖自力之行故名不廻向之行」（行卷）とあつて、衆生に於ては不廻向の行である。然れば、念佛は一般の「行」という概念をもつて規定されるべきものではない。故に『歎異抄』第八章には

念佛は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行するにあらざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ。ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに、行者のために非行非善なり

と云い、同じく第十章には

念佛には無義をもて義とす、不可稱不可説不可思議のゆへにとおほせさふらひき

と云う。念佛の非行非善性・念佛の無義性ともに念佛の絶對性を示すものである。

次に法然上人の念佛を祖述された『行卷』に、「大行者則

稱無導光如來名」と明かし、「斯行即是」と押えて、所稱の名號の徳に於て

攝諸善法具諸徳本極速圓滿眞如一實功德寶海。故名大行」と顯わしてある。この攝諸善法の相用體の三徳は大行の「大」なる所以を示すものであるが、そのまま念佛の諸行に對する絶對性である。「極速圓滿」とは諸行にはみられない名號の力用である。然もその絶對性を「眞如一實功德寶海」となり、一實眞如の妙理に於て示し、名號の徳を全うした稱名念佛が顛倒法でないことを明かにされた。さきに、法然は名號は「萬徳之所歸也」と示した。それを私は個別と全體の論理に於て考察した。親鸞は「眞如一實」と云う。もつとも、本願も名號も阿彌陀佛の證果も悉く眞如一實とみるのが、聖人獨自の眞如觀である。故に念佛の絶對性は原理的には聖人の眞如觀に於て、名號成就と他力廻向の意義を明かにすべきである。それには當然、本願・法藏菩薩・阿彌陀佛についても體系的に解明されなければならない。然し、其等について論ずべき紙數をもたないから、今はただ問題を指摘するにとどめて、他日にゆずる。

第十五回學術大會は、五月二十三日（土）、二十四日（日）の兩日にわたつて京都・大谷大學において開催されます。